

マザーシエルターとは
マザーシエルターとは、左記のような設備を備えた、出産前後の妊産婦が安全に出産するための施設です。
● 出産待機室（宿泊できる部屋）
● 産後経過観察室
● 分娩室職員の当直室
● 付添家族の宿泊室
● シャワー、トイレ
● 簡易調理場

は入院できる施設のある診療所は多くありません。そのため、妊婦さんたちは、出産予定日に診療所に向かうしかありません。診療所が自宅から遠いことや、陣痛が始まってから移動するのが難しいことから、自宅出産を選ばざるをえない家族が多くいます。こうした状況を改善するため、ロシナンテスは2021年にムワプラ地域の診療所に併設する形でマザーシエルターを建設しました。建設後、遠くの病院へ行くことや自宅出産を選ぶ妊

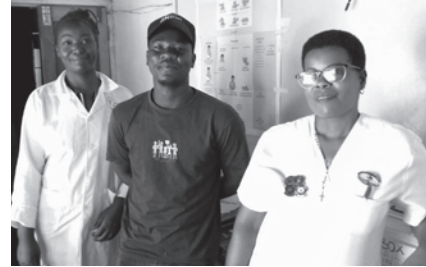


ザンビアで2棟目のマザーシエルター建設を開始

2棟目のマザーシエルターの建設地が決まりました。すでに井戸の掘削や基礎工事が進んでおり、2024年5月の完成を目指しています。



地域の9千人をカバーするチコンコメ2診療所



チコンコメ2診療所のスタッフ

チコンコメ2診療所課題	
課題	解決方法
空間の狭さ	十分な広さの待機室、ベッドスペースの設置
電気供給不足	電気供給
水供給不足	施設専用の井戸掘削
アクセスの悪さ	エコーの導入による出産予定日の測定、待機室の設置

程度のお金を貯めておくこと
● 万が一の出産リスクに備えて、ある程度のお金を貯めておくこと
● その機会にエコー健診を受診すること
● 妊娠が分かった段階でいち早くマザーシエルターに行くよう促すこと



何度もメッセージを発信することが重要です

この原因を知るべく調査をすると、妊婦さんたちは特にアクセスの悪さから、診療所での出産を避けていることが分かりました。しかし、長距離移動や移動資金の不足はどの地域でも発生しているためこの地域特有の原因とは

この地域に2棟目のマザーシエルターを建設することを決定しました。

新たな建設地をチコンコメ2地域に決定

チサンバ郡の20の医療施設を調査した結果、チコンコメ2地域の自宅出産数と上位の病院への紹介数がとびぬけて多いことが分かりました。また、妊婦さんの約6割が診療所での出産を避けていました。

2月16日に起工式を行いました。起工式とは、工事の開始を宣言する式典です。中央州の副事務次官、郡の伝統的酋長、保健省の政策決定者、郡の保健担当の他、12名の村長、近隣住民約300人が集まり、大変盛り上がった式典となりました。

マザーシエルターへの期待は非常に大きく、とりわけ地域を治める酋長からは施設だけでなく地域の保健ボランティアの育成も含めて期待されています。また、女性の参加者の中には、「高い交通費を払って街の病院に行かずに済む」や「出産待機施設のおかげで慌てて行かずに済む」といった期待の声がか



《第31号》
認定NPO法人ロシナンテス 発行
〒802-0082
北九州市小倉北区古船場町1-35
北九州市立商工貿易会館 7F
TEL:093-521-6470
E-Mail:info@rocinantes.org
特定非営利活動法人ロシナンテス ROCINANTES

スーダンだより
現地スタッフの今………2面
ザンビアだより
結核事業アップデート…3面
ザンビアだより
ザンビア駐在アイテム…4面
雲外蒼天／
日々ツラツラ日記………5面
国内イベント情報
イベントレポート………6面
国内ニュース………7面
事務局からのお知らせ…8面



完成イメージ

を伝えることができました。ムワプラ地域で1棟目を建設した過去の経験から、住民が集まる機会には必ず周知すべきだという教訓を活かすことができました。

事務局だより

スーダンでの軍事衝突発生から一年、それ以外にも激動としかいえない国内外の情勢のなか、多くの皆さまから変わらぬご支援をいただいていることに厚く御礼申し上げます。

本部の向かいにある旦過市場の再建復興・再開発がようやく動き始めたところに、新年早々の鳥町食堂街での大火事がおきました。身近なところもなかなか落ち着きませんが、少しでも明るく前向きに進めるよう努めていきます。

日本の端っこにあるロシナンテスですが、他団体との協働や連携が日常の光景になりつつあります。ロシナンテスだけではできないことも、複数の団体で手持ち資源を出し合うことで実施可能になります。能登半島地震の被災地支援もそうですし、事務仕事でも他団体との連携が行われるようになっていきます。

活動当初からすると信じられない変化ですが、今後とも自分にやれることを精一杯やっていこうと思います。

私たちNPO法人ロシナンテスの名前は、小説「ドンキホーテ」に出てくるドンキホーテが乗る痩せ馬のロシナンテに由来しています。「私たち一人一人は痩せ馬ロシナンテのように無力かもしれないが、ロシナンテが集まり、ロシナンテになれば、きっと何かできるはずだ!」と考え、「ロシナンテス」と名付けました。

今後ともこれを信念として一步一步進んでいきたいと考えておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願い致します。

ロシナンテス応援企業

内科・外科・消化器内科・緩和ケア内科
医療法人 明気会
岩本クリニック
理事長 岩本拓也
北九州市小倉南区中興一丁目20-50
TEL 093-472-1281
FAX 093-472-6712

がんばれロシナンテス!

税理士法人 小城会計事務所

北海道旭川市東光8条1丁目1-1
TEL.0166-31-2313

内科／消化器内科／リウマチ科
柏木内科医院
院長 柏木 陽一郎
福岡県北九州市小倉北区片野2-21-10
tel 093-921-7943
http://www.kashiwagi-naika.com/

ロシナンテスのスタッフを応援します!!

日常の事業活動の利益をNPO活動の篤志へ繋げたい
時計宝飾・古物売買
株式会社 ブランドリーネ
代表取締役 青山晃一
〒276-0046
千葉県八千代市大和田新田355-16-103
TEL:047-450-5720
yachiyo@e-daikoku.com
https://shop.e-daikoku.com/info/spot/detail?code=0000000239

異動や転勤で整理した本、お送りください!



<キャンペーン概要>

- ◆期間／2024年3月1日～4月30日(つなぐ書店への品物到着日)
- ◆収集対象／ご自宅に眠っている古本など
※受付可能な種類については下記ウェブサイトでご確認ください。
- ◆キャンペーン特典／アフリカ布の三角しおり(先着100名様)
- ◆古本寄付詳細／https://hon-bokin.jp/rocinantes



古本寄付とは、不要な本やDVDを「つなぐ書店」さんにお送りいただくと、その査定額が全額ロシナンテスへの寄付金になる、という取り組みです。つなぐ書店は、様々な障害が原因でお仕事に悩む方の支援・雇用を目的とした古本屋さんです。本やDVDをお送りいただくと、つなぐ書店で働く皆さんのお仕事創出にもつながります。

今回の古本キャンペーンの寄付金は、ザンビアでマザーシエルターを建設するために使用されます。ザンビアは、妊産婦死亡率・新生児死亡率が高い国で、それらを改善するために、政府は施設での分娩を推奨しています。しかし村落部

では、診療所が遠い、移動手段がないといった事情に加え、診療所に待機する場所がないために、陣痛が始まってから何時間も歩いて診療所に向かいます。そのため、あきらめて自宅出産する、診療所に向かう途中で産まれてしまう、などのケースが多く発生しています。一人でも多くの妊婦さんが、安全安心に出産できる環境を作るため、古本寄付でご協力ください!

今回、古本寄付にご協力いただいた方に、アフリカ布で作った三角しおりをプレゼントします! ザンビアの妊婦さんたちが愛用するアフリカ布で、現地の風を感じていただけたらうれしいです。



古本と同様に、切手やはがきも集めています! 対象になるものをご確認いただき、同封の封筒に入れてお送りください。

<集めているもの>

- ◆書き損じはがき、未使用はがき
※未投函であれば、額面の古いもの(50円など)もお送りください。 ※一度投函されたはがき(返送されたものを含む)、私製はがきは対象となりません。
- ◆未使用切手、使用済切手
◆図書券、商品券などの金券、収入印紙
※古いもの、地方限定のものも可。
- ◆未使用・使用済みテレホンカード
◆未使用・使用済みプリペイドカード

※受け取り書の送付には、1～2か月ほどお時間をいただきます。
※ご寄付の領収書は発行いたしません。領収書をご希望の方は「お宝エイド」への送付をお願いします。

#KeepEyesOnSudan スーダンの人々へのメッセージを募集します

軍事衝突発生から1年。

2面でご紹介したように、スーダンは現在も混乱の最中にあり、多くの人々が地方部へ異動したり国外へ非難したりしている状況です。「忘れ去られた紛争」になりつつあるスーダンの人々への連帯の気持ちを届けるべく、皆さまからのメッセージを募集します。

お送りいただいたメッセージは、アラビア語に翻訳し、ウェブサイト等にまとめた上で、SNSやチャットツールでスーダンの人々に届けたいと思います。

下記いずれかの方法で、【2024年5月15日まで】にお送りください。
(いただいたメッセージは、報告書やロシナンテスのwebサイト・SNSに掲載させていただきます)

- 〈必須内容〉
メッセージ(手書きの絵や画像も可※ご返却はできません)
お名前※匿名可(ウェブサイト、広報物等に掲載可能なもの)
- 〈応募方法〉
専用webフォーム◆https://forms.gle/opPpqvR3duPsdL8G6
FAX◆093-521-6471
メール◆info@rocinantes.org
(画像の応募はメール添付をお願いします)
- 郵便◆表紙発行住所 認定NPO法人ロシナンテス宛



イベント会場募集中

会場を貸してくださる方を募集しています!

- ・収容人数: 30～100名程度
- ・場所: 公共交通機関でのアクセスが可能

詳細はこちら



スーダン軍事衝突から1年、 模索する支援

スーダンでの軍事衝突が発生してから4月15日で1年になります。2024年3月11日現在、スーダン国内では2月半ばから数週間におよぶ通信遮断が発生しており、国内の様子はわかりにくい状況となっています。一部の地域では、通信手段が復旧されているとの報告もあるものの、大半の地域では依然繋がらない状況となっており、現地の状況を報道する海外メディアも極端に少なくなっています。私たちのスタッフとの定期連絡も、途絶えてしまっている状況です。

その一方で、周辺国へ難民として避難してきた人々の過酷な生活状況が報告されています。IOM（国際移住期間）やUNOCHA（国連人道問題調整事務所）などの報告によると、隣国チャドには約55万人、中央アフリカに約3万人、南スーダンに約57万人、エチオピアに約5万人、エジプトに約45万人、そして国内で避難している人々は900万人いると言われています。チャドの難民キャンプでは、長引く避難状況の中で、食料

ロシナンテスのスーダン人スタッフ5名のうち、総務・会計担当のラビア、事業担当のタグワは隣国のエジプトに避難しています。今回は2名のスタッフが記した手記をご紹介します。

2023年11月に エジプトに向かったタグワ

私の家族は5人で、ナイル川東部のハルツームバハリに住んでいました。2023年4月15日、私たちはテレビから流れる戦争のニュースやSNSに投稿される「家から出るな」という警告で目を覚ました。銃声を聞き、国軍総司令部とハルツーム空港から煙が上がるのを見るまで、何が起きているのかわかりませんでした。その後、国軍とRSF（準軍事組織・即応支援部隊）が衝突し、2時間後には銃声が首都に響き渡りました。私たちは恐れおのき、恐怖のどん底に突き落とされました。私たちの家はRSFに包囲されていました。生活は止まり、電気も水もなく、物価は上昇し、病院は閉鎖されました。



各地からのバスが押し寄せている
アルキン陸路国境



2月にカイロで久しぶりに面会。
元気そうで安堵しました

今はエジプトについて安全だと感じています。が、何年も続くかもしれないスーダンの厳しい状況や、仕事が安定しないことに悲しみが残ります。これが現在の最大の不安です。一日も早く戦争が終結し、元通りのスーダンでの日常が無事に戻ってくることを祈っています。

今年1月にエジプトへ
出国したラビア

2023年4月15日、スーダンのハルツームで内戦が勃発したとき、私は子どもたちを安全な場所に連れて行くことだけを考えていました。内戦が始まり子どもたちは学校に通えなくなりました。私は夫と2人の子どもたちとともに、エジプトへ北上する長い旅に出ました。

内戦勃発直後、私たちはハルツームの衝突地域に近い自宅アパートで10日間ほど過ごした後、ハルツーム郊外のカラクラ地域に移動し、46日間家族、父母、姉妹、姪と過ごしました。その後、ハルツームの南210キロのところにある、私が生まれ育った町アルディヤインに移動しました。しかし、ここにはハルツームから逃れてきた人が多く、街は混雑し生活費も高くなったため、10日後の6月21日に、今度はハルツームから330キロほど離れたコステイへ移動し、7ヶ月間滞在しました。最終的に、私たちは子どもたちの将来、学校教育のことを考え、スーダンを離れてエジプトに行くことにしました。

エジプトへ北上する陸路の旅は2024年1月12日に始まりました。スーダン南部に位置するコステイからスーダン北部のハルファに向かうのに、まず3つの都市を経由しガダーレフに到着しました。そして早朝にガダーレフを出発して約13時間かけてアトラバへ向かいました。そして3日目の朝にはハルファへ向かいました。途中、バスがパンクしてしまつたので、ハルファに到着したのは2日後でした。ハルファで9日間過



エジプト国境に近いハルファでバスを待つラビア一家

ごした後、エジプトに向かいました。国境沿いには大量の難民がいて、国境を越えるのに2時間ほど歩きました。バスとフェリーを使い、エジプト南部の最初の村アブシムルに到着した後、7時間かけて南部の都市アスワンに到着しました。その後、約1千キロ離れたカイロへ向かいました。

私たちは今カイロの親戚のアパートで彼らと喜びと幸福を分かち合い過ごしています。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に難民として登録し、難民登録カードの取得を進めています。しかし、これは、時的なものなので、さらに滞在ビザを申請する必要があります。とても重要なできごとは、息子たちを学校の生徒として登録ができたことです。

今回の手記で、ローカルスタッフを含めたスーダンの人々に想いを寄せるとともに、スーダンに平和が戻ることを願ってやみません。ロシナンテスは現在、スーダンの人々へ届けるメッセージを募集しています。詳細は8面にご案内しておりますので、ぜひご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



ポータブルX線装置の使い方のオリエンテーション

結核の早期発見にむけて 見えてきたポータブルX線装置の有効性

ロシナンテスはザンビアで、ポータブルX線装置を使って結核患者の早期発見を目指す事業を行っています。複数の医療施設で装置を共有し活動した結果、装置の有効性が検査データでわかってきました。

ザンビアでは未だ深刻な感染症

現在の日本では大きく話題にならない結核は、ザンビアにおいては未だに深刻な感染症の一つです。年間約59万人もの人々が結核に感染し、発症者数は今も大きく減少していません。ザンビアでは、結核は男性の死因ランキングで6位、女性では7位となり、死亡原因としても主要なものとなっています。この高い感染率は、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者が多いことも因です。HIV感染者は結核にかかりやすくなるため、両者の重複感染が頻発しているのです。2021年には、ザンビアの新規結核感染者の34%がHIV感染者であるというデータも明らかになっています。しかし、結核に感染しても



人工知能を活用し結核の可能性をスコアで表示

早期の発見と治療開始、薬の適切な服用により、8〜9割の患者が完治へ向かうことがザンビアでも確認されています。

解決の关键是早期発見

結核の早期発見には、痰を採取して調べる喀痰かくたん検査、尿検査、およびX線装置で行う胸部X線検査が不可欠です。しかし、中央州では、各郡に喀痰検査や尿検査の機器を備えた病院が存在していますが、X線装置は配置されていません。従って私たちの対象地域であるチサンバ郡やチボンボ郡の医療施設は、主に喀痰検査・尿検査のみを実施してきました。しかし、これらの検査のみでは結核患者の見落としが生じる可能性があります。喀痰検査の結果が陰性であっても、結核と疑われる症状が持続する場合は、X線検査が必要ですが、しかし、地元の住民はX線検査を受けるために、ルサカやカプウェエなど遠く離れた首都や中央州の都市部まで数時間かけて自力で向かわなければ

なりません。しかも、家族の都合や経済的な理由などから地元を離れることが難しく、結果として受診が遅れ、症状が悪化するケースが多く発生しています。ザンビア政府のデータにおいても、年間約1.9万人の結核患者が見逃されていると報告されています。

ポータブルX線装置を試験導入

こうしたX線検査への医療アクセスを改善するために、ロシナンテスは富士フイルム株式会社の協力を得て、同社のポータブルX線撮影装置を試験導入するプロジェクトを始めました。この装置は約3.5kgと非常に軽量で、スツケースに入れて持ち運びができ、充電式であるため、場所に縛られず検査が行える仕様になっています。また、従来のフィルム式ではなくデジタル画像を用いており、撮影時間やフィルム現像時間も削減されます。さらに、この装置には結核診断に特化した人工知能が搭載され、医師の診断をサポートすることができ、X線画像の保管と確認ができるクラウドシステムも導入し、インターネット環境があればどこ



ムワンジュニ診療所でのX線検査の曜日を告知

でも画像が確認できる体制も整えました。

4つの施設で装置を共有

本事業の対象地域として、中央州チサンバ郡のリテタ郡病院と傘下医療施設であるチサンバヘルセンター、そして同州チボンボ郡のムワチソボラ総合病院と傘下医療施設であるムワンジュニ診療所の4施設を選定しました。4施設間でX線装置を運搬し、共有することで、地域住民が容易にX線検査を受けられるようになり、結核患者の早期発見と治療へのアクセスの向上が期待されます。さらに、X線検査は結核で行う胸部検査だけではなく、手胸のけがなど他の用途にも使用するように各医療施設にお願いしました。

昨年5月にリテタ郡病院で運用を開始しました。12月にはムワチソボラ総合病院も追加し、各病院で曜日を設定し、2施設間で装置を共有し運用できるようにしました。今年1月からは毎月の第1・3火曜日にチサンバヘルセンターへ、第2・4火曜日にムワンジュニ診療所にそれぞれ運搬さ

れ、運用されるようになりました。ヘルセンターと診療所には放射線技師がいないため、各病院からX線装置を運搬する際に、放射線技師も共に派遣される仕組みとなっています。さらに、本事業の環として、表計算ソフトを各医療施設に導入し、結核患者のデータを入力してもらうことで、結核患者の傾向を分析できる情報管理体制も整えました。

従来の検査では見逃されていた 結核患者を発見

これまでの成果として、4施設合わせて2400人もの患者がX線検査を受診することができました。そのうち、1010人の方が結核と疑われる症状がある患者で、結核の陽性者と診断された方は115名いました。特筆すべき点は、この115人の陽性者のうち、従来行ってきた喀痰検査では陰性だが、X線検査の結果陽性と判明した患者は74名もいたことです。これは全ての結核疑い患者の約7%の割合です。今回のX線装置による試験事業により、従来の検査体制では見逃されていた結核患者を発見できるようになったことが、データから明確になりました。結核陽性者と診断された患者は全て治療を開始しています。

見逃しが起こりやすい幼児、 高齢者 HIV感染者

今まで見逃されていた結核患者の傾向をさらに分析すると、特に幼児、高齢者、HIV感染者の見逃しが発生しやすい傾向にあると判明しました。これらの患者が見逃される理由として、幼児と高齢者は痰を上手く出せないため唾液が中心となり、検査



手足のけがなどの診断にも活用

結果が正確に出ていない可能性があります。また、HIV感染者も結核菌への免疫反応が低下するため、結核菌を取り巻く膿ができなくなり、痰の量が減ってしまいます。これらの理由から、喀痰検査では、幼児、高齢者、HIV感染者の結核の見逃しが発生しやすいことがわかりました。

さらに、地域性を分析すると、人口が多い地域や人の移動が頻繁な交通の要所などに近い地域ほど感染者数が多くなるということもわかってきています。また、結核以外にも、このX線装置は肺炎の診断や骨折などの整形外科疾患の診断にも運用されました。特に本事業の医療施設はザンビアの主要道路に近いいため、車の事故なども多く、こうした患者の診断にも効果的に運用されています。

X線検査の患者数が常に多いため、装置数を増やすこと、それに合わせて装置を共有する対象施設数を増やすことも視野に入れて、富士フイルム株式会社とも協力し、今後活動も継続していきます。また、本事業で判明してきた結核患者の傾向に対して、中央州保健局、両郡の保健局と共に対策案を議論し、実行していくことを計画しています。

雲 外 蒼 天

BCGの接種の開始、日本独自のハンコ注射

結核を予防するワクチンであるBCGは、牛に感染する牛型結核菌を時間をかけて弱めたもので世界的に使用されています。これはフランスのパスツール研究所の研究者によって開発され、1921年に初めて新生

児に投与されました。日本では、結核を「国民病」「亡国病」と呼び恐れてきました。明治以降の産業革命による人口集中に伴い国内に蔓延し、その高い死亡率や感染力のために、1930年代から1950年まで日本人の死亡原因の第1位であり続けました。今年3月まで放映されていたNHKの連続テレビ小説「ブギウギ」でも、終戦後間もない時代に主人公の恋人が結核で命を落とす場面が描かれ話題になりました。当時の人々にとって身近で深刻な感染症だったことがうかがえます。

しかし、医療が進歩し栄養状態や生活水準が良くなるにつれ、結核は薬を飲めば治る病気となりました。2021年から2年連続で、人口10万人あたりの新規患者数を示す罹患率は10人を切り、日本は世界保健機関（WHO）の定義する「低蔓延国」となりました。日本はどのようにして結核患者を減少させることができたのでしょうか。

戦前・戦中の日本では結核に対して有効な治療薬はなく、空気の良いところで療養し、栄養を取るぐらいしかありませんでした。療養には、年単位の長い時間が必要でした。1949年結核の治療薬であるストレプトマイシンの製造が日本でも許可されてから、有効な治療薬による化学療法がおこなわれるようになります。また、外科手術も、ろつ骨を何本か切除し肺に圧を加えて結核菌をとじこめようとする胸郭成形術に代わって、肺の病巣部分だけを切除する肺切除術が行われるようになりました。薬と高度な外科手術によって結核は治る病気になり、療養の時代から治療の時代へ移行し、入院期間も短くなっていきました。

結核予防法の全面改正

医療の発展とともに、戦後の結核の抑制にとくに大きな効果をもたらしたできごとは、1951年に行われた結核予防法の全面改正です。国民の30人に1人以上が結核を発病しており、結核だけで国民総医療費の27%を占めていたことから、この法改正は国民総力を挙げて行われました。

改正された結核予防法を軸として、左記のような結核対策が行われました。

◆健康診断の対象者を拡大し、結核患者の効果的かつ効率的な発見を行う。

◆BCG接種の制度により青年層以下の結核発病予防を重点的に行う。

◆所得格差や地域的な医療資源の不均衡等に関わらず、全国民に平等に医療を提供する。

◆結核患者の登録制度を設け、必要に応じて患者や医療機関に対する指導を行う。

◆制限的措置（就業制限、命令入所、消毒、調査等）を設け、蔓延防止を図る。

亡国病と恐れられた結核 日本はどう立ち向かったのか

かつての日本では、結核を「国民病」「亡国病」と呼び恐れてきました。明治以降の産業革命による人口集中に伴い国内に蔓延し、その高い死亡率や感染力のために、1930年代から1950年まで日本人の死亡原因の第1位であり続けました。今年3月まで放映されていたNHKの連続テレビ小説「ブギウギ」でも、終戦後間もない時代に主人公の恋人が結核で命を落とす場面が描かれ話題になりました。当時の人々にとって身近で深刻な感染症だったことがうかがえます。

しかし、医療が進歩し栄養状態や生活水準が良くなるにつれ、結核は薬を飲めば治る病気となりました。2021年から2年連続で、人口10万人あたりの新規患者数を示す罹患率は10人を切り、日本は世界保健機関（WHO）の定義する「低蔓延国」となりました。日本はどのようにして結核患者を減少させることができたのでしょうか。

戦前・戦中の日本では結核に対して有効な治療薬はなく、空気の良いところで療養し、栄養を取るぐらいしかありませんでした。療養には、年単位の長い時間が必要でした。1949年結核の治療薬であるストレプトマイシンの製造が日本でも許可されてから、有効な治療薬による化学療法がおこなわれるようになります。また、外科手術も、ろつ骨を何本か切除し肺に圧を加えて結核菌をとじこめようとする胸郭成形術に代わって、肺の病巣部分だけを切除する肺切除術が行われるようになりました。薬と高度な外科手術によって結核は治る病気になり、療養の時代から治療の時代へ移行し、入院期間も短くなっていきました。

結核の多いザンビアが参考にできることは

今も世界の総人口の4分の1が結核に感染しています。そしてその多くが途上国であり、ザンビアもその1つです。日本のこれまでの経験が、ザンビアの結核対策にも参考になるのではないのでしょうか。医療技術が進歩している現代において必要なことは、すべての地域で誰もが予防診断・治療の3つにアクセスできるよう制度や実施体制を整えることです。

ロシナンテスではこのうち診断の部分に貢献すべく、2023年にポータルX線装置を活用した結核事業を始めました。現在は4つの施設のみでの実施ですが、事業の有効性を示しながらさらなる普及・活用を行っていく予定です。ロシナンテスは、今後もザンビア政府と連携し、結核で苦しむ人々を少しでも減らすことができるようサポートしていきます。



医師から説明を受けサングラスを装着した患者さん



エコー画像診断の利点を妊産婦に説明



研修に参加できなかった保健ボランティアに使用方法を教える

一症状の重い患者の集まる眼科にサングラスを寄贈

2024年2月12日、ライオンズクラブ国際協会332・C地区眼鏡リサイクルセンター運営委員会さまよりご寄贈いただいた1千本のサングラスを、ザンビア中央州のカブエ中央病院にお届けしました。

この病院は年間1万2千人の患者を受け入れており、そのほとんどが屋外労働者です。長時間紫外線にさらされた結果、白内障を煩う、角膜や瞳孔へのダメージで視力が低下するなど、生活に支障が生じているケースも多くあります。眼へのダメージ予防や術後のケア

さらなる利用者の拡充など、継続的にモニタリングを実施してきました。そして1月、このプロジェクトの評価のために、SPAQを使用した妊産婦にインタビューを実施し、関係者からフィードバックをもらう評価セミナーを開催しました。医療従事者や妊産婦からは「多胎や逆子など、リスクが高い妊婦を早期に発見でき、早めにより設備の整った病院への紹介ができる」などの好意的な評価が多く見受けられた一方で、SPAQの情報入力に伴う作業の負担増加や、健診時間の長期化の改善を求める指摘もあり、今後の改善の余地があることがわかりました。

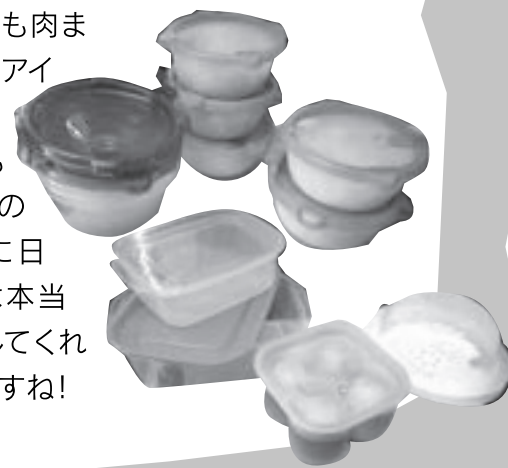
今回のプロジェクトは1月で終了しましたが、ロシナンテスは、データ入力項目の削減や入力の手間の軽減などのシステム改善を行いながら、引き続きSPAQ利用の促進と導入地域の拡大を模索していきます。

日本から何持ってきた？ザンビア駐在の必須アイテム

アフリカに駐在しているスタッフは日本から何を持ってきたのでしょうか？駐在員の佐藤と専門家の杉本が、ザンビアに持ってきた良かったもの、持ってきたけど使っていないものについて紹介いたします！

砥石まで持ち込む！本格的な調理器具

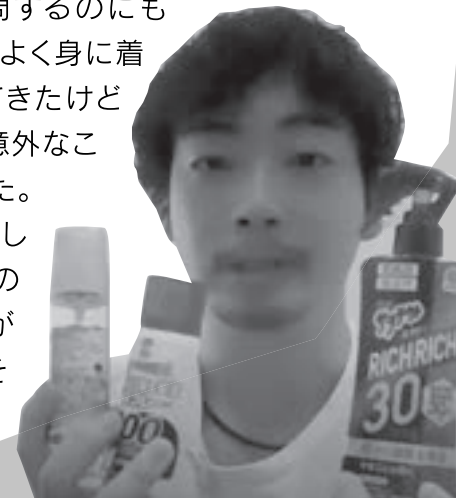
専門家の杉本は、ザンビアでも自炊中心の生活を送っており、普段から愛用している調理グッズについて紹介してくれました。杉本が日本から持ってきた調理グッズは多種多様で、包丁や砥石まで持ち込むなど本格的！普段からきちんと自炊をしているのが伝わってきます。またタッパーや電子レンジで炊飯、蒸すものなど、百元ショップの便利なグッズもたくさん持ちこんでいます。電子レンジ蒸し器は、街中で買った肉まんを蒸すのに使っています。ザンビアでも肉まんが買えるのですね！これらのアイテムはザンビアでも購入できるものもありますが、日本のものの方が品質がよいのだそうです。本当に日本の百貨グッズは本当に生活を豊かにしてくれる最強アイテムですね！



アフリカに滞在する際には、ぜひお二人の持ち物を参考にしてみてください！

アフリカ、ザンビアならではの対策グッズ

まず駐在員の佐藤が、持ってきて良かったものとして紹介してくれたのは、「蚊対策グッズ」です。マラリアにからないようにするためにも、体や部屋にまく虫よけスプレーは生活していく上では欠かせない必須アイテムです。またザンビアは標高が高く日差しが強いため、街を歩くにも村落部を訪問するのにも「帽子とサングラス」はよく身に付けています。一方持ってきたけど使っていないものは、意外なことに「洗濯ネット」でした。佐藤は手洗いで洗濯しており、便利な洗濯機のありがたみを感じながら日々過ごしているそうです。



ハルツーム大学図書館内の和室に掲げた『無東西』も紹介しました



挙げ、スーダン復興の際には日本の経験を活かした協力を願うと私たちに述べられました。現状を憂うだけではなく、あくまでも未来を見据えようとする力強さに心打たれました。

日タツラツラ日記 ⑮ JICAスーダン事務所開設35周年オンラインイベントに登壇

スーダン駐在員の七條です。2024年3月7日に、ODA70周年・JICAスーダン事務所設置35周年を記念した日本とスーダンの大学交流イベントに登壇しました。現在カイロに拠点を移しているJICAスーダン事務所と、熊本大学をオンラインで繋ぎ開催されました。イベントでは、現在カイロに滞在しているハルツーム大学の学生による活動や、ハルツーム大学から熊本大学に留学しているハリッド氏によるプレゼンテーションなどが行われ、スーダンと日本の若者にスーダンへの協力やODAへの理解を促すこと、ハルツーム大学と熊本大学の連携強化を目指すことが発信されました。ロシナンテスからは、私がエジプトのカイロから、理事長川原が熊本大学からオンラインで参加し、これまでのスーダンでの活動などを紹介しました。印象に残っているのはハルツーム大学のサミール教授の言葉です。学生たちに、現在の軍事衝突が終わった後のスーダンの未来を見据えるようにメッセージを送っていました。そして太平洋戦争後、日本が速やかに戦後復興した経験を例に

挙げ、スーダン復興の際には日本の経験を活かした協力を願うと私たちに述べられました。現状を憂うだけではなく、あくまでも未来を見据えようとする力強さに心打たれました。

NEWS & INFORMATION

国内ニュース&お知らせ



診察を行うボランティアの医師

ロシナンテスは災害医療活動を行う特定非営利活動法人HUM (Humanitarian Medical Assistance: 災害人道医療支援会)と共同で、能登半島地震の被災者支援を行いました。

ボランティア派遣や車両調達などの後方支援

発災直後の2024年1月2日より活動するHUMからの要請を受け、ロシナンテスでは主に、ボランティアの募集、派遣や車両の調達といった後方支援を行いました。

食料も寝床もトイレもままならない発災直後の被災地は、支援する側にとってもかなり厳しい環境でした。被災地で活動経験のある方であっても、1週間以上の活動は難しいだろうと判断し、順番に現地に入っていただけるよう、複数のボランティアの派遣調整を行うことになりました。

募集開始以降多くの方に応募いただき、1月末から2月下旬にかけてロシナンテスから医師2名、看護師3名を派遣することができました。日頃から大変なお仕事に従事されているにも関わらず、できることを、とおっしゃってくださるお一人お一人のあたたかいお気持ちに、励まされました。ご応募くださいました皆さま、情報拡散にご協力くださいました皆さまにも、心より御礼申し上げます。

またHUMは、避難所や病院を拠点に、孤立した住宅やほかの施設への往診も行っていきます。その際に使用する車両が足りていなかったため、ロシナンテスは2台の車両の調達も行いました。石川県七尾市・珠洲市を中心に、支援者の輪送及び巡回診療(避難所・介護施設への往診)で活用されました。

この2台の車両は、浜田省吾さんと仲間の皆さまから構成されるJ.S.Foundationからのご支援で購入しました。J.S.Foundationさまからのご支援は、浜田省吾さんの事務所であるロードアンドスカイ様からの応援や、コンサート会場での募金が集まったものです。たくさんの方のあたたかい気持ちで、こんな大きな力になっています。ご協力いただきました皆さまに心より感謝をお伝えしたいと思います。

3月以降はピースウィンズ・ジャパンへ車両を貸与

HUMの珠洲市での活動は、行政に引き継がれ2024年2月末をもって終了しましたが、ロシナンテスでは、現地で活動を継続する認定NPO法人ピースウィンズ・ジャパンへ引き続き車両2台を貸与することを決定しました。ピースウィンズ・ジャパンは、紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人々へ支援活動を行っているNGOで、能登半島地震でもいち早く被災地へ現地入りしました。同団体の運営する空飛ぶ搜索医療団「ARROWS」は、これまで発災直後の搜索・救助から医療支援、物資支援、避難所支援まで、さまざまな活動を展開しています。貸与した車両はおもに珠洲市での避難所訪問や物資調達・配布をはじめとする被災者支援活動に使われる予定です。



「アフリカから学ぶ国際教育プロジェクト」出前授業を行いました

2023年10月から2024年3月まで、北九州市の企業版ふるさと納税による協働事業「アフリカから学ぶ国際教育プロジェクト」を実施しました。これは、変化の激しい現代に国際社会で活躍できる人材を育成するため、子どもたちや市民に、グローバルな視野を広げる学びの場を提供するプログラムです。

このプロジェクトの活動の一つとして、市内の小学校9校と高等学校1校で出前授業を行いました。講師は、アフリカでの生活経験があり、元小学校教諭である川原佳代が担当しました。授業の中では、北九州市出身の理事長川原尚行が、スーダンやザンビアでどのような思いで支援活動を始め、困難を乗り越えて継続してきたのかを取り上げました。

実際に授業を行ってみると、子どもたちや先生の関心の高さに驚かされました。授業中だけでなく、休憩中にも質問をしにくる子や実際に民族衣装を着てみる子もいました。授業後に書かれた感想文には、ロシナンテスのこと、アフリカでの生活のこと、内戦のことなど、それぞれが印象に残ったことが書かれていましたが、その事実を伝えただけでなく、自分の生活に置き換えて、考えを深められているものが多く見られました。子どもたちの真剣な眼差しを見て、先生たちもこの授業の意義を感じてくださっていました。本プロジェクトは3月で終了となりますが、ロシナンテスはこれからも、未来を担う子どもたちへの発信の機会を作っていきたいと考えています。



民族衣装や民族楽器を紹介し異文化を知る機会を作りました

能登半島地震の支援を行っています

石川へ向かうため、福岡を出発する直前の車両

EVENT INFORMATION

国内イベント情報

2024年4月15日(月) 【オンライン】
スーダン事業報告会

参加費
無料

アフリカ・スーダンの首都ハルツームで、2023年4月15日の現地時間朝より、軍事衝突が始まりました。なぜ内戦が起きてしまったのか、現在の現地の状況はどうなっているのか、改めてお伝えするとともに、ロシナンテスのローカルスタッフの声や今後の活動の見通しをお届けします。またイベント後には、皆さまからもメッセージをいただき、私たちがつながっているスーダンの人々に届けられればと思います。

日時 ■ 2024年4月15日(月) 20:00開始／21:00終了
場所 ■ オンライン(ウェブ会議ツールzoomを使用予定)
申込URL ■ <https://www.rocinantes.org/news/event/?no=207>
必要なもの／PCまたはスマホ
(資料や映像等を画面に共有しますので、PCがおすすめです)



2024年4月27日(土)【大阪】〈認定NPO法人テラ・ルネッサンスさんが主催するイベントに理事長の川原が登壇します〉

大阪で開催される「2人の国際協力NGO創設者が志を語る!～支援の現場から見た平和への道筋～」に理事長の川原が登壇します。1人では途方もなく遠く感じてしまう「平和」について、諦めず前に進むためにできることを、認定NPO法人テラ・ルネッサンス創設者の鬼丸昌也さんと語り合います。

日時 ■ 2024年4月27日(土) 14:30開始／16:20終了
場所 ■ ターネンビルNo.2 イベント会場
〒540-0012 大阪府大阪市中央区谷町2丁目3-1
申込URL ■ <https://peatix.com/event/3866607/view>



参加費
無料



開催イベントレポート

【ご支援者様限定】1月13日(土)
皆さまのご支援でできたこと～2023年を振り返って

ご支援者の皆さまに日頃の感謝の気持ちを直接お伝えしたく、1月13日(土)にオンラインによる活動報告会を開催しました。駐在員の七條と田中より、スーダン・ザンビアでの2023年の活動を報告するとともに、理事長の川原より2024年の活動や今後の展望についてご説明しました。ご参加いただきました皆さまからの質疑応答について一部ご紹介します。

❶ 国内における教育事業ではどのようなことを行っていますか。

A (川原) アフリカが貧しいという観点ではなくて、アフリカの人々の生き方を学ぶことが、今の日本の参考になるのではないかと考え、小学校での出前授業を展開しています。電気がない、水がないアフリカを知り、日本の日常のありがたみを知ってもらいたいです。また、高校ではアフリカにおける課題を高校生に自ら考えてもらうという取り組みも行っています。将来的には、彼らが大学生、社会人になったときにアフリカの事業地に来てもらいたいし、アフリカで起業したいという人がでてきたらいいなと期待しています。

❷ スーダン退避から8か月たった今の心情を教えてください。

A (七條) 4月には皆さまからあたたかいお声をいただきありがとうございます。無事日本に帰ることができ、そして今はザンビアで事業をできていることをうれしく思っています。ただ、友人や一緒に仕事をしてきたメンバーなど未だスーダンにいる人も多く、彼らのSNSでの報告を見て心を痛めています。厳しい状況ですが、スーダンでの事業を再開できるようがんばりたいと思っています。

(川原) 多くの方のご尽力で帰ってくることができました。これから世界情勢は厳しくなり、同じような事例がまた起きる可能性は高くなるのではないかと考えています。今回、誰一人命を落とすことなく退避することができたのは成功事例ではあるので、国として今後の糧としてはいいと思います。そしてスーダンの一日も早い平和を願っています。

EVENT REPORT

3月9日(土)
ロシナンテス活動報告会&写真展ツアー

3月9日(土)に福岡県北九州市の西日本工業大学小倉キャンパスで活動報告会を開催しました。当日は、60名以上にご参加いただき、理事長の川原より、活動を始めた経緯やスーダン・ザンビアでの現在の活動をお伝えしました。そして「アフリカの地域医療に革命を起こすため、取り組みを一步ずつ前に進めていきたい」と今後の展望を語りました。

報告会終了後は、近隣会場で同時開催の写真展「アフリカを知る活動展示会～医とこころと人～」に移動し、ザンビアでの活動を撮影くださった写真家上山敦司さんと川原による写真展ツアーを開催しました。1枚1枚の写真のエピソードや込められた思いを聞き、参加者の皆さまからは「写真展をガイドしてもらいながら見ることができ、より理解が深まり良かった」「一つ一つの生のエピソードがどれも魅力的で衝撃的で印象深かった」「間近で話を聞けて、本当に貴重な体験だった」などうれしい感想をいただきました。



写真展は3月6日から12日の1週間で開催され、のべ170名以上の方に来場いただきました